

乳幼児とのふれあい体験学習における絵本製作指導の改善に関する研究

柴 静子 日浦美智代 高橋美与子 一ノ瀬孝恵
三根 和浪 藤井 志保

はじめに

近年、少子化が進行する中で、高等学校家庭科における乳幼児とのふれあい体験学習の重要性は益々高まってきている。平成16・17年度の広島大学学部・附属学校共同研究においては、このふれあい体験学習の効果を高めるための改善策として、「ことばによる応答理論」を導入して実践を行い、高い効果が見出された。

本研究ではこれを踏まえて、ふれあい体験学習の際に使用する手作り絵本に焦点を当てて、製作活動の改善を図り、質の高い絵本を作成させること及び学習効果を測定することを目的とした。研究対象は、「家庭基礎」(2単位)を履修中の広島大学附属福山高等学校1年生5クラス及び「家庭総合」(4単位)を履修中の同附属高等学校2年生1クラスとした。乳幼児の心身の発達の理解を含めた絵本製作の授業は、前者では平成18年6月～11月まで20時間にわたり実施し、また後者では、9月～12月まで、断続的に14時間実施した。

研究方法としては、まず、平成17年度に両校の生徒が作製した手作り絵本を大学生に分析させて、改善点を明確にした。その結果を踏まえて、ふれあい体験の際に使用する絵本の製作活動を従来のそれより高度化する指導を試みた。すなわち、絵本を媒介とした親子のコミュニケーションの大切さを描いたビデオを試聴させる、内外の既製の紙絵本や布絵本を研究させ、特徴を把握させる、などであった。さらにブックスタート運動を紹介するなどして、乳児期から絵本とふれあうことの意義について理解させた。その後、生徒の希望に合わせて、紙絵本もしくは布絵本の製作に入らせた。手作り絵本の対象となる乳幼児の年齢は、附属高校では1クラス全員が0～1歳、附属福山高校ではクラスの中を6つに分けて、ほぼ均等に0, 1, 2, 3, 4, 5歳とした。絵本製作活動の前後では、ブックスタート運動を紹介するなどして、乳児期から絵本とふれあうことの意義について理解させた。次いで、附属

福山高校では自作絵本の読かせの練習をさせ、後日実施する「ももやま保育園」でのふれあい体験に備えさせた。他方、附属高等学校では、実際に乳幼児にふれあうことが不可能なため、教室において赤ちゃん人形を乳児に見立てて読み聞かせを行わせることにした。

なお、附属福山高校の授業者は高橋美与子教諭および佐藤敦子講師、附属高等学校は日浦美智代教諭であった。

I 平成17年度附属福山高等学校の生徒が製作した絵本の評価

附属福山高等学校では、ここ10年間余、保育学習の一環として近所の保育園を訪問する時間を設けて、生徒の知識面とともに情意面の変容を図る授業を行っている。近年は、保育園訪問の際には自作絵本を持参して、乳幼児に読み聞かせることを学習活動の中に取り入れている。

このような絵本製作とふれあい体験を組み込んだ保育学習は高い効果を示すことが同校の高橋美与子教諭より示唆されていたが、これまで実証的に確かめられていた訳ではなかった。そこで今回の研究においては、絵本製作学習の効果を明らかにするために、まずは前年度(平成17年度)に生徒が自作した絵本を客観的に評価・分析し、問題点を把握することにした。これによって、よりよい絵本を製作させる指導の方途を明確にすることが可能になると考えた。

研究の方法としては、広島大学教育学部人間生活系コースの2年生及び3年生、40名に対して、平成17年度に高校生が製作した絵本139冊を配布し、黙読をさせながら、10の調査項目を設けたアンケート用紙に絵本の評価を5点法で記入させた。

その方法は、1冊の絵本について、2～3人の学生を割り当て、「絵本のできばえ」(2項目)、「読み聞かせを可能にする絵本か」(2項目)、「幼児の受け止め方」

(3項目)、「使用材料の適切性」(1項目)、「絵本作りの意義」(1項目)、「自作絵本の適切さ」(1項目)という10項目に関して、「とてもそう思う(5点)」、「そう思う(4点)」、「どちらでもない(3点)」、「あまり思わない(2点)」、「まったく思わない(1点)」の5点法で評定させた。その後、全ての絵本について、各項目別に1～5点の出現頻度を調べ、それぞれが全体に占める割合を算出した。なお、調査時期は平成18年4月であった。

図1は附属福山高校生の製作した絵本に対する評価をグラフ化したものである。この年の絵本は、A3の比較的厚い画用紙の中央部分に横幅の2分の1の切れ目を入れて8画面を作る、よく普及している簡便な紙絵本であった。図1が示しているとおり、「感動的な話になっているか」、「実際に幼児に読み聞かせをしたくなるような絵本であるか」、「いつまでも持っていて、自分の子どもに読み聞かせをしたくなる絵本であるか」という視点から見ると、かなり改善の余地があることが判明した。さらには絵本の形状に対しては、市販絵本に近いものが求められていることが示された。

II 平成17年度附属高等学校の生徒が製作した絵本の評価

附属高等学校の生徒が平成17年度に製作した絵本、102冊についても同様の方法で広島大学教育学部人間生活系コースの学生が評価した。その結果は図2にグラフ化して示したとおりである。なお、附属高校生が作製した絵本は、B5サイズで、色画用紙を表紙に用いて、中に2つ折りにした画用紙を数枚はさんで簡易製本にしたものである。

図2は、絵本の10の評価項目について、「とてもそう思う」と「少しそう思う」をひとくりにし、また「あまり思わない」と「全くそう思わない」をひとくりにしたものである。附属福山高校生が製作した絵本と比較すると、いずれの項目においても良好かもしくは同等の反応を示している。「感動的な話になっているか」、「実際に幼児に読み聞かせをしたくなるような絵本であるか」、「いつまでも持っていて、自分の子どもに読み聞かせをしたくなる絵本であるか」、「市販絵本の形状が求められているか」という項目については、福山高校の場合と同様に改善の必要性があることが示された。

次いで表1及び表2は、生徒が製作した102冊の絵本について、10のアンケート項目の総得点が高かった5冊と、総得点が低かった5冊を取り出して、「ストー

リー」と「絵の特徴」を示し、改善点を示すとともにコメントとして簡単な説明を加えたものである。

高い評価を得た絵本のストーリーは、主人公がかわいく生き生きしている、全体にやさしい雰囲気は漂っている、オノマトペが有効に使われている、カラフルな絵が描かれ、表情豊かな人物(動物)が登場する、といった特徴をもっていた。反対に、低い得点しか得ることのできなかった絵本は、まずは幼児に感動を与えることに配慮したストーリーではなく、自己の思いを前面に出すことに執着している、絵が丁寧に描かれておらず色合いも美しくない、幼児の発達段階を全く考慮していないなどの問題点があることが判明した。そこで平成18年度は、以下に述べるように、保育学習における絵本製作指導の改善を図った。

III 平成18年度附属高等学校の絵本製作学習の実際と効果

1 指導のねらい

広島大学附属中・高校では12年度まで中学3年生で保育体験学習を行ってきたが、それ以降は、時間的な制約から保育園へ訪問して園児と一緒に過ごすという体験ができない状況にある。このような中、平成17年度から絵本製作を通して、絵本が乳幼児の発達にどのような効果をもたらすのか、絵本のもつ効用を理解させることで生徒の人間的な感情の醸成と自らの成長に関する理解の深化を図ってきた。

平成18年度は附属高等学校の「家庭総合」における絵本製作学習のあるべき姿を求めて、次のような一連の取り組みを実施した。学習目標は次に示したとおりである。

- ① 現代の子どもたちを取り巻く状況を知る。
- ② 子どもが健やかに育つためのよい環境のあり方について考えることができる。
- ③ 絵本製作を通して、絵本が果たす役割についてあらためて考えることができる。
- ④ 自分の身近な範囲だけでなく、世界のさまざまな国の子どもたちの人権侵害を調べ、まとめることができる。
- ⑤ 世界や日本の子どもたちを取り巻く問題や課題を知り、おとなと同様の権利を持っていることを理解し、子どもが育つためにふさわしい家庭や社会環境の整備の大切さを理解することができる。

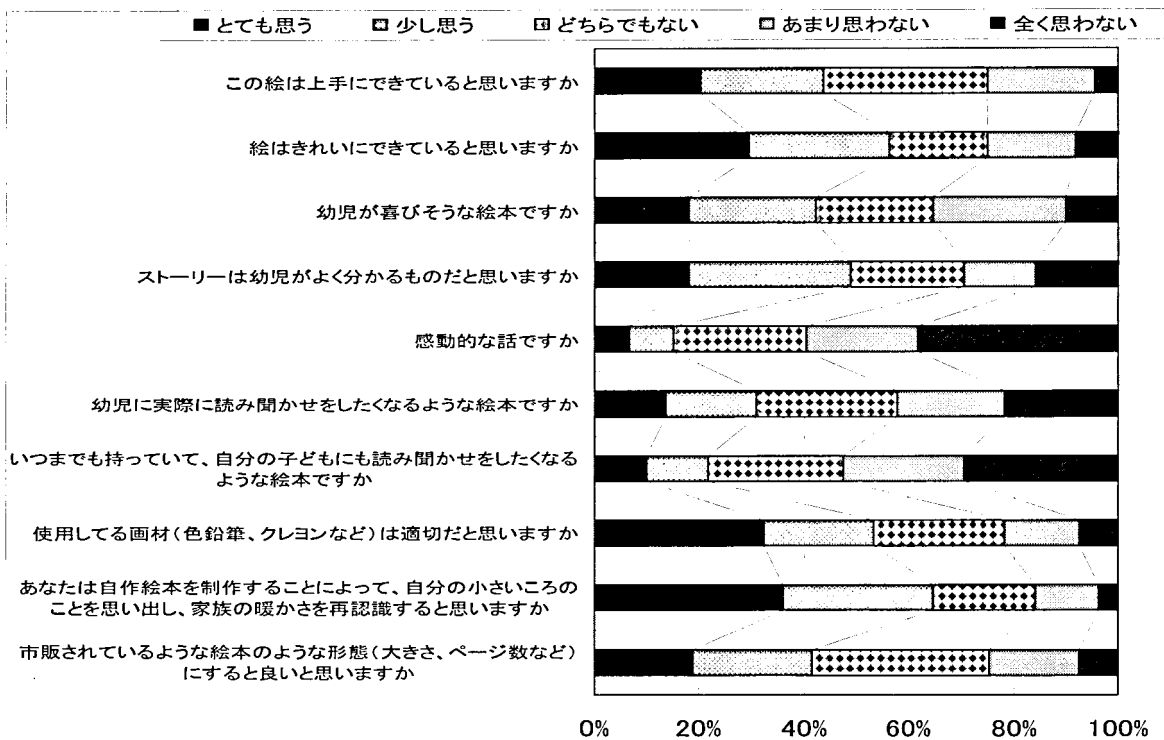


図1 平成17年度附属福山高校生製作絵本の評価

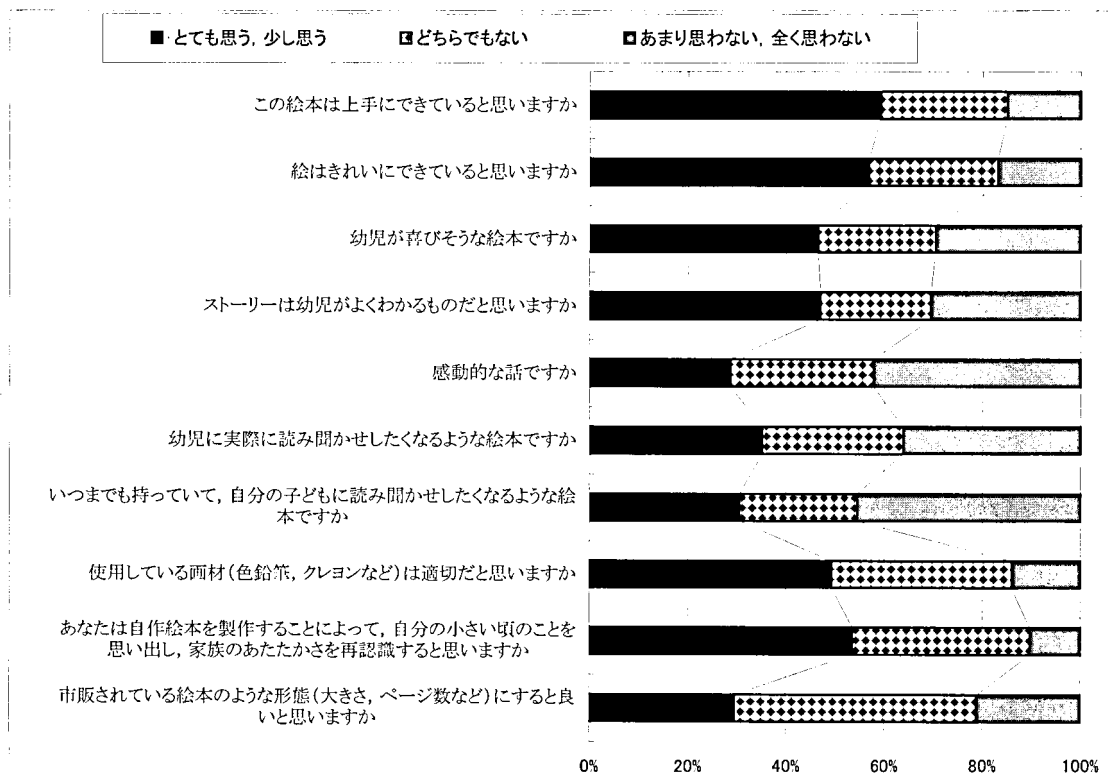


図2 平成17年度附属高校生製作絵本の評価

表1 学生の評価において高い得点を得た絵本

順位	題名	ストーリー	絵の特徴	改善点	コメント
1	だれのしっぽ	1頁「だれのしっぽ」、2頁「ふさふさしっぽだれのしっぽ」、3頁「おうまさんだ」、4頁「しましましっぽだれのしっぽ」、5頁「とらさんだ」、6頁「ちよんぼりしっぽだれのしっぽ」、7頁「ぶたさんだ」、8頁「あれしっぽがおちてるぞ」、9頁「なんだへびさんか」、10頁「白紙」	クレヨンを使用して、初めにしっぽの絵だけを書き、「だれのしっぽ」と問いかけ、次のページにその動物全体の絵を描いている。	クレヨンを使用しているが、他のページに色が移ってしまう。	「ふさふさ」、「しましま」、「ちよんぼり」などオノマトペを利用しており、強調したい単語のクレヨンの色を変えている。絵や構成が簡単でわかりやすいので、得点が高かったと思われる。
2	こねずみたっくん	1頁「こねずみたっくん」、2頁「あるところに、とてもねぼすけでくいしんぼうなねずみがありました。なまへはたっくんです。」、3頁「『ああ、よくねた』(中略) 台所へ行くことにしました。」、4頁「たっくんが台所に行くときテーブルにケーキがのっていました。(中略)『こらっ、でてけ!』」、5頁「たっくんはほうきでおいはらわれてしまいました。(中略) ろうかへ行くことにしました。」、6頁「たっくんがろうかへいくとチーズが落ちていました。(中略) わなだったのです。」、7頁「あぶないあぶない。(中略) しんしつへ行くことにしました。」、8頁「たっくんがしんしつへいくと、きれいなすいそうがあって、さかながおよいでいました。(中略) すいそうをのぼりはじめました。」、9頁「すいそうの上まで上ったたっくんは、(中略) ポッチャーン!! ところが・・・」、10頁「やっぱりたっくんはおぼれてしまいました。(中略) かじさんはおこつてはさみをちよきちよきしました。」、11頁「たっくんがやっどのおもいで、(中略) たっくんは外へ行きました。」、12頁「おひさまぼかぼか、そとはあたたかくて(中略) あるいていきました。」、13頁「すると、めのまえにおおきなみのついたかきのがあったではありませんか(中略) 木をのぼっていきました。」、14頁「『いただきませう。』(中略) おなかいっぱいかきのみをたべました。」	色えんぴつを使用している。場面に合わせて、ケーキやほうき、チーズ、水桶、お日様、柿などが登場する。こねずみほどのページにも登場する。	大部分が幼児向けに平仮名で書かれているが、ところどころ漢字で書かれているので、平仮名に直すか、読み仮名をつける。	登場する小ねずみはかわいらしく、絵本の中で細かい表情(笑う、あくび、困る、うれし等)を見せているので、いきいきと語るので、平仮名に直した物語りもおもしろいので得点が高かったと思われる。
3	くまさんとわたし	1頁「くまさんとわたし」、2頁「絵のみ」、3頁「おかあさんがつくってくれたおはながらくまさん(中略) 『おやすみなさい』」、4頁「きょうもそろそろねなくっちゃ(中略) ベットでまっているはずのクマさんが・・・」、5頁「『いないっ!』」、6頁「ふとんをめくってみてもベットのしたをみても」、7頁「『どこにもいないっ!』」、8頁「『ねえおかあさんあたしのクマさんしらない?』」、9頁「『あつ、ごめんねクマさんな・・・』」、10頁「『ここよ! あれつ、クマさん・・・』」、11頁「『なんかちがう・・・あつりボンがついてる!』」、12頁「『りボンをつけてあげたの。かわいくなったでしょ。』」、13頁「『かわい!! ありがとう』」、14頁「きょうもいっしょにおようね『おやすみなさい』」	文字は鉛筆、絵は鉛筆と色鉛筆を使用している。ストーリーに合わせ変わる、女の子の表情がわかりやすいように大きく描かれている。	全体的に薄い色なので、メリハリのある色を使用するとよい。また、鉛筆で描いてある部分があるので、そこに色を入れるとよい。	優しい母親の様子、うれしい女の子の様子や表情が絵本から読み取れる。
4	はやくちことば	1頁「はやくちことば」、2、3頁「おとこのことおんなのことがあそんでます」、4頁「『ねーねーはやくちことばしよーよ!』』『いーよ!』」、5頁「これいえるかな?」、6頁「なまむぎなまごめなまたまご」、7頁「絵のみ」、8頁「いえたかな?」、9頁「これいえるかな?」、10頁「あかまがみあおまがみきまきまきじゃま」、11頁「絵のみ」、12頁「いえたかな?」、13頁「これいえるかな?」、14頁「あかまがみあおまがみきまきまきまき」、15頁「いえたかな?」、16頁「これいえるかな?」、17頁「となりのたけがきにたけたのはたけたてかけたかったから」、18頁「絵のみ」、19頁「いえたかな?」、20頁「これいえるかな?」、21頁「すもももももものうち」、22頁「絵のみ」、23頁「いえたかな?」、24頁「これいえるかな?」、25頁「カエルびよこびよこびよこびよこあわせてびよこびよこ6びよこびよこ」、26頁「絵のみ」、27頁「いえたかな?」、28頁「これいえるかな?」、29頁「となりのきやくはよくかきくきやくだ」、30頁「いえたかな?」、31頁「絵のみ」	クレヨンを使用して、絵はカラフルな色づかいで描かれている。早く言葉を書き、早く言葉に関する絵(卵、バジャマ、紙など)を右側に書いている。	クレヨンを使用しているが、他のページに色が移ってしまう。	幼児の言葉の発達に役に立つ絵本である。物語の構成が、コメント→早口言葉→コメント→早口言葉・・・の繰り返しであり分かりやすいので得点が高かったと推測される。
5	いっしょにあそぼ	1頁「いっしょにあそぼ」、2頁「すうはこうえんにいきました」、3頁「あのこはだあれ?」、4頁「『あそぼ。おなまえは?』」、5頁「でも、おとこのこにはわかりませんでした」、6頁「ゆーう」、7頁「裕君のおかあさんはそうおしえてくれました」、8頁「ゆーう・・・すうはいっしょうけんめいれんしゅうしました」、9頁「わたし、すう」、10頁「こころはすっかりつうじあいました」、11頁「いっしょにあそぼ。なかよくあそぼ」、12頁「白紙」	文字は油性ペン、絵は色鉛筆を使用している。カラフルな色づかいで描かれている。人物の表情はにこやかに描かれている。	『あそぼ』と言われた男の子がなぜ、分らなかつたのか、ということが幼児に伝わりやすくとよい。	耳の聞こえない男の子と女の子の触れ合いの物語であり、心が温かくなるような絵本である。

表2 学生の評価において低い得点を得た絵本

順位	題名	ストーリー	絵の特徴	改善点	コメント
102	かずのおはなし	1頁「かずのおはなし」、2頁「one [ワン] ・ オンリー1がナンバー1、ナンバー1がオンリー1」、3頁「two [トゥー] ・ 僕はナンバー2にしかなれなかった。・日本の国会は二院制です。」、4頁「three [スリー] ・ 政府は三位一体の改革を進めている。・僕らは3バンドを組んでいます。」、5頁「four [フォー] ・ テープルには4つのケーキがおいてあった。・日本は四季がはっきりしている。」、6頁「five [ファイブ] ・ OLはアフターファイブを楽しむ。・よい子のみなさんは5時には家に帰りましょう」、7頁「six [シックス] ・ V6がグリーンアリーナでライブをした。・義務教育は小学校の6年間と中学校の3年間の六三制だ」、8頁「seven [セブン] ・ 私は昨日セブンイレブンのジュースを買った。・旧七帝大に入るのが私の夢です」、9頁「eight [エイト] ・ 僕は父に八つ当たりされた。・彼は八方美人だ」、10頁「nine [ナイン] ・ 『9』を見ると日本人は『苦』を連想する。・私は昨日はおぼれたが九死に一生を得た」、11頁「ten [テン] ・ 十人十色ということわざがある。・10を底とする対数を常用対数とする」、12頁「The end」*漢字にふりがなをつけている	主に赤と黒、オレンジ、緑の油性ペンを使用しているが、表紙と裏表紙にはクレヨンを使用している。絵は描いておらず、文字の横に数字の数だけ○印を書いている。	例文がこどもに分かりにくい内容であるので簡単にする。○印のみで、絵が描かれていないので数字に関連した絵を描く。	数字が学べる絵本を製作したかったのだと思われるが、対象が幼児向けではない。
101	ぜいきん	1頁「税金についてのほん」、2頁「税金」、3頁「税金は、みんなからおくのがあつめるおかね。」、4頁「所得税」、5頁「おとうさんおおかあさんが、かいしゃからもうおかねから、あつめるおかね。」、6頁「消費税 今は100えんで5えん」、7頁「ものをかうときに、おくにははらうおかね。だんだんふえていきますよ。」、8頁「固定資産税」、9頁「おうちをもっていると、はらわなきゃいけないおかね。もってるだけではわらないといけません。ふしぎですね。」、10頁「贈与税」、11頁「おかねをひとにあげるときに、はらわないといけません。ふしぎですね。」、12頁「ほかにもいろいろな税金があるよっ！みんなもおおきくなったらべんきょうしてねっ！」	文字の色はカラフルに書かれている。絵は一筆書きで描かれたような家や車、お札や人が描かれている。	こどもに理解しやすい題材を選ぶ。絵は1色の色で描くのではなく他にも色を使用する。また、もっと詳しく描く。	ふりがなはふつてあるが、漢字が多く幼児向けの絵本とは言にくい。
100	らくえんをもとめて	1頁「楽園を求めて」、2頁「彼はこの世で最高人間だ」、3頁「彼は最も賢く」、4頁「最も足が速く」、5頁「最もスマートで」、6頁「最もお金持ちで」、7頁「最も勇気があり」、8頁「最も清潔で」、9頁「最も一———素晴らしい」、10頁「・・・」、11頁「・・・はあ」、12頁「・・・」、13頁「誰か・・・」、14頁「誰かいませんか・・・」、15頁「人類が減びた世界で、今日も彼はイブとなりうる存在を捜してさまよひ続けている」、16頁「楽園(エデン)はまだみつからない」	表紙に色鉛筆で地球が描かれているが、その他はすべて鉛筆が使用されている。一筆書きで描くような人間の絵がどのページにも登場する。	鉛筆だけでなく、色鉛筆を使い分ける。また、主人公である人間の絵をもっと詳しく描く。	物語がネガティブなまま完了したので、得点が低かったと思われる。また、色鉛筆を使用しておらず鉛筆のみであったことも低得点の要因であると推測される。
99	あおぞら	1頁「あおぞら」、2頁「めのまえにひとつのとびら」、3頁「絵のみ」、4頁「ひらいたさきにはまっしろなせかい」、5頁「白紙」、6頁「そしてじぶんのまわりにはいろがふえていった」、7頁「絵のみ」、8頁「いつまでもふえつづけておもっていた」、9頁「絵のみ」、10頁「とびざんひろがやみ。いままであったすべてのいろがのみこまれた」、11頁「ずっとずっとどこへかはわからないけれどあるきつづけた。ひとりですっとあるきつづけた」、12頁「あきらめたくない。じぶんにはやりたいことがあった。いろはなくしたけれどじぶんのきもちはまだのなかに・・・」、13頁「絵のみ」、14頁「めのまえにちいさなひかり」、15頁「さきになにかがあるかわからないけれど。そこにむかって、はしってはして・・・」、16頁「ひかりのさきにおおきくひろがったそこは・・・」、17頁「絵のみ」、18頁「とてもすんだきれいなあおぞらがあった」、19頁「絵のみ」、20頁「白紙」	主に鉛筆で描かれており、部分的に色鉛筆が使用されている。色鉛筆、黒鉛筆で塗りつぶされただけのページが数枚ある。	いくつかの図形は描かれているが、絵らしい絵が描かれていないのでこどもに興味を与える形をもつたものを取り入れる。	何も描かれていないページや、全面に塗りつぶしたページなど、話のあらすじよりも絵の分野で得点が低かったと思われる。
98	(無題)	1頁「白紙」、2頁「ほへら あひ あひひ」、3頁「まへ まへうへら」、4頁「ちよるんば ちよるんば ちよるんば」、5頁「べけにえんじよえ ふああもるすあ ごお」、6頁「どむじやあ べへによんぬま」、7頁「だぼりや ぼによ めりや」、8頁「あべによもれ」、9頁「げりやべじやら もけけけ」、10頁「ぐじゅじりよひた」、11頁「じえめる ぶびえりや めぎあら」、12頁「おわり」	カラフルな色づかいだが、四角や丸、楕円、三角、くねくねした紐のような形など、適当な図形が描かれている。	たくさん描いてある図形の趣旨がわかりにくいので、もっとこどもに理解しやすい絵を取り入れる。	オノマトペを使用している絵本であり、しかし得点が低い理由として、絵本を評価した学生側の認識不足が挙げられるとともに、この絵本の絵に対する評価が低かったことが推測される。

2. 指導計画 (全14時間)

- 第1次 子どもの誕生・・・2時間
- 第2次 乳幼児期の成長・発達・・・2時間
- 第3次 絵本を製作しよう・・・6時間
- 第4次 子どもの生活と保育・・・1時間
- 第5次 親になること・・・1時間
- 第6次 子どもの権利と福祉・・・2時間

3. 学習の内容

ここでは、平成17年度までの取り組みを改善した第3次「絵本を製作しよう」について概要を示す。

(1) 第3次「絵本を製作しよう」の目標

- ①絵本を媒介とした親子のコミュニケーションの大切さを理解する。
- ②既製の絵本の特徴を知る。
- ③乳幼児期から絵本とふれあうことの意義を理解する。
- ④0～1歳児を対象とした紙絵本または布絵本を製作することができる。

(2) 第3次学習の流れ (全6時間)

①第3次の1時間目 (50分) の学習内容

1) 絵本とは何か、絵本を声に出して読むこととはどのような効果があるのか。絵本の果たす役割として、絵本を媒介とした親子のコミュニケーションの大切さを描いたビデオ「NHKお父さんへ赤ちゃんからのメッセージ」(NHKスペシャル1995年)を視聴させた。

番組中の生まれてきた赤ちゃんにお父さんとお母さんが絵本「ねないこだれだ」を読み聞かせて、赤ちゃんの汗の量を比較する実験、胎内の赤ちゃんにお父さ

んが話しかけた声が届いているかという実験の場面を視聴させた。この視聴から生徒は、親子のコミュニケーションの必要性や父親の育児参加が要求されている昨今、母親任せにするのではなく父親が子どもの育児に関心をもつことが大切であること、赤ちゃんは両親に別々の役割を求めていることなどを理解した。

2) 生徒自身の絵本との出会い、幼児期における絵本の体験、絵本から学んできたことを振り返らせる。そして、内外の既製の紙絵本や布絵本を研究させ、特徴を把握させる。ここで用いた内外の既製の絵本は、0歳児を対象にした紙絵本16冊(That's not シリーズ)、0歳児を対象にした布絵本を8冊、生徒が子どものころ読んできた(読み聞かせてもらっていた)乳幼児を対象にした絵本「ねないこだれだ」、「いないいないばあ」、「三匹のやぎのがらがらどん」、「もりのなか」、「おおきなかぶ」など20冊の合計3種類44冊であった。

3) 子育ての楽しさを伝える「ブックスタートの運動」を通して乳幼児期から絵本とふれあうことの意義について理解させた。

②第3次の2～5時間目 (50分×4時間) の学習内容

対象児に適した絵本を構想し、製作する。製作の条件は、(ア)紙絵本もしくは布絵本、(イ)1人から5人までの個人またはグループでの製作、(ウ)手作り絵本の対象となる乳幼児の年齢は0～1歳、(エ)ページ数は表紙を含めて8～12ページとした。

③第3次の6時間目

完成した絵本を発表させるとともに、生徒による相互評価を行った。相互評価の結果は図3に示したとおりである。

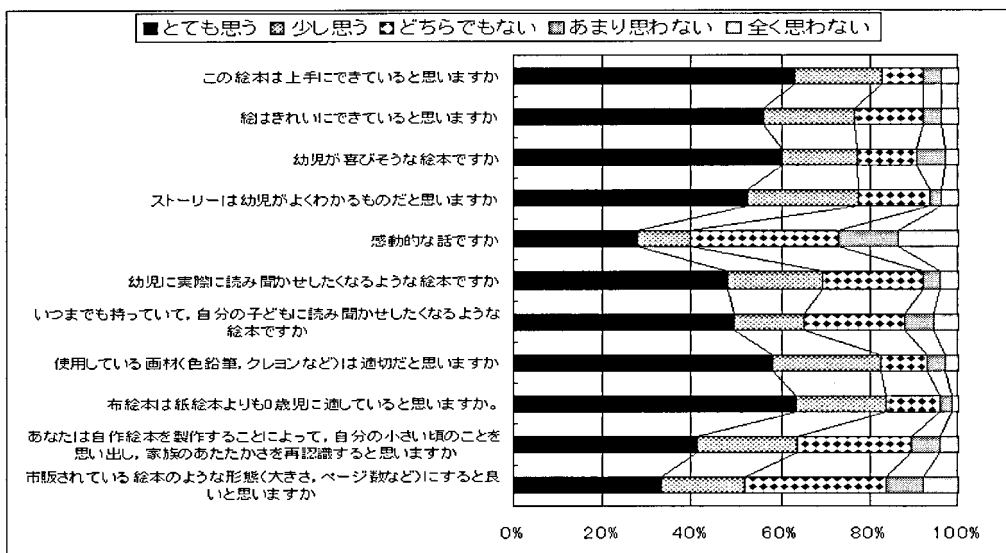


図3 平成18年度附属高校生徒製作絵本の相互評価

図4 乳児(0歳児)にとって絵本にふれることの効果

□ とてもそう □ ややそう思う □ どちらでもない
 □ ややそう思わない ■ とてもそう思わない □ 未記入

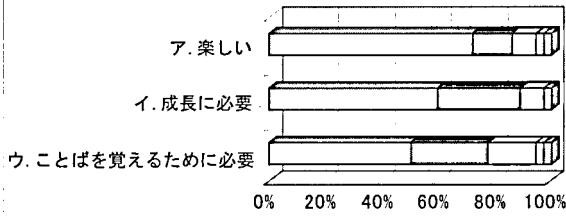


図5 幼児(1~5歳)にとって絵本にふれることの効果

□ とてもそう □ ややそう思う □ どちらでもない
 □ ややそう思わない ■ とてもそう思わない □ 未記入

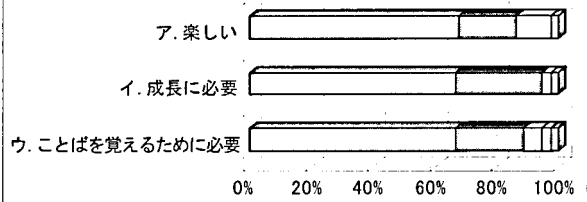


図6 親やまわりの人が乳児(0歳児)に絵本を読んであげることはその子にとってどのような効果があると思いますか。

□ とてもそう □ ややそう思う □ どちらでもない
 □ ややそう思わない ■ とてもそう思わない □ 未記入

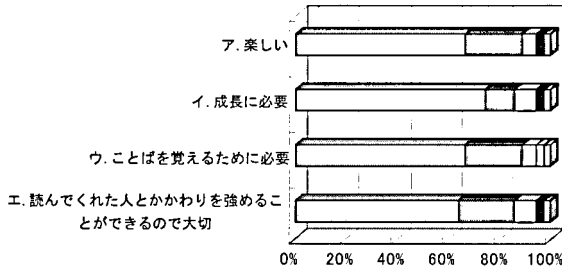


図7 親やまわりの人が幼児(1~5歳)に絵本を読んであげることはその子にとってどのような効果があると思いますか。

□ とてもそう □ ややそう思う □ どちらでもない
 □ ややそう思わない ■ とてもそう思わない □ 未記入

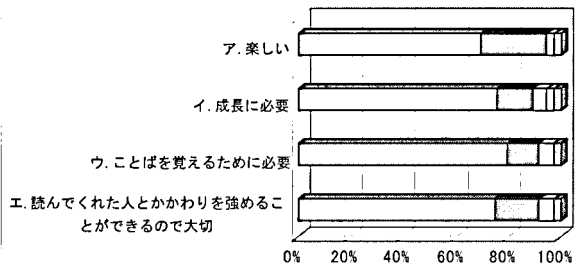


図8 手作り絵本についてどう思いますか。(絵本製作後アンケート)

□ とてもそう思う □ ややそう思う □ どちらでもない
 □ ややそう思わない ■ まったくそう思わない

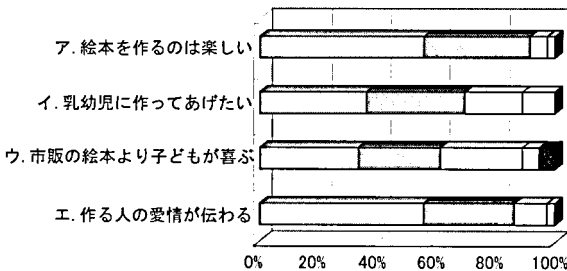


図9 何歳を対象にした絵本ですか。

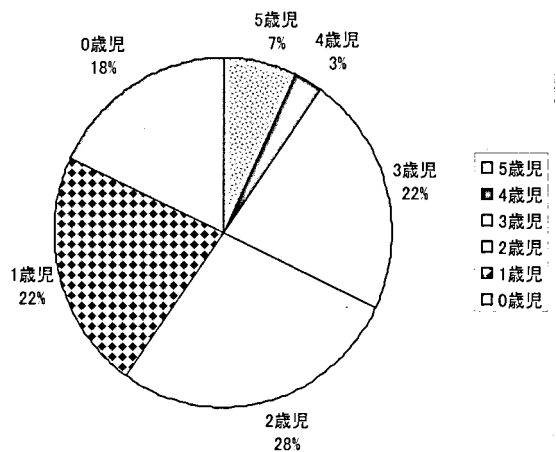


表3 絵本製作前後の気持ちの変化

絵本を製作するとき気をつけたことや、気をつけたいいけないと思ったことはどんなことがありますか。	絵本の製作を通して考えたことや身についたことにはどんなことがありますか。	絵本の製作をする前後で乳幼児に対する気持ちにはどのような変化がありますか。	その他絵本の製作についての感想を製作前の気持ちと比較しながら書いてください
文字を大きくすること 絵を色鮮やかにすること	小さな子どもに対する思いやり。 小さい子の立場に立って考えた。	やさしくいたわる気持ちになった。	初めは絵本の製作とか面倒だと思ったけど、作っていくうちに楽しくなっていた。(他7人)
わかりやすくみていて楽しいものを作るよう心がけた。また、危険ではないようにした。	乳児や幼児はどの程度のことかわかるのか、また、どんなものだったらすぶのか。	乳幼児のことをもっと理解しようとするようになった。	自分が思っていたよりも作るのに時間がかかった。上手くできるかどうか不安だったけど思ったよりよい作品に仕上がったと思う。
子ども、特に赤ちゃんは何でも口に入れると習ったので取り外しができるものや触ると危ないものは使わずでできないこと。形は余り複雑ではないが、変化に富むものを作る。自分の常識を当てはめないこと。	絵本の製作を通して今までよい教育(サーブ)は”手に入れるもの”という認識があったけど、自らの手で作っていきけるものであり、本来はそうあるべきなんだと考えた。また、自分の目的を持って作った絵本なり、人形なり、子どもに対する作品は、自分の愛着もわくし、自分が一番使い方がわかっていいなと思った。身についた事としてはいろんなところにいるような工夫の余地を見出せるということだと思ふ。	私にとって乳幼児とはまだまだ未知の存在で、その上、未だ親の扶養のもとにある自分が育てるという考えは余りなかった。しかし、絵本を作る過程で友達とあれこれ悩み、どうやったら喜んでくれるかという問題にあたり、結局は自分が真剣に子供のことを考えることが前提にあるのだと思った。だから”よくわからな”というイメージから今では”精一杯考えてあげたい”という考えで今はいる。	絵本作りの際して最初はわくわくしていたけど布絵本を作るのは大変そうというのが実際の感想だった。しかし、材料を集めたり作っていくうちに愉しむことができた。まずは実践することが大事なんだと思います。自分の子どもに作るには忙しいかもしれないけど友達に作るのもいいかと思ふ。
子供がさわって危険なものを使わない。	子どもたち楽しさが伝わるような絵本づくりを考えた。	絵本を読ませても意味が無いと思っていたけど、乳幼児にとっては絵本が一番楽しめることだと思うようになった。成長を優しく見守ってあげたいという気持ちになった。	製作前はもう全然完成形が見えなくてやる気がなかったけど、実際完成したらすごく面白かった。
小さい子どもがさわるのでがつたものなどは使わないようにした。	子どもの目線になってきた。 手触りに気をつけた。 母親が物語を作りやすい設定にした。	乳幼児はこれから知識を吸収するのだから、正しいことを教えてあげないとだめだと思った。	時間が少なくて大変だったけど、どうやったら子どもが楽しめるかを考えたのでよかった。
とにかく幼児にとってわかりやすくすること。視覚や触角(手触りなど)、聴覚(音)などさまざまな感覚で楽しめること。	幼児にはより単純でわかりやすいのが一番なんだろうと市販の絵本を見つけて思いました。五感を刺激する仕掛けが多く見られたので、幼児は喜怒哀楽という本心にシンプルな感情のかなと思ふました。そして、絵本を製作するに当たって自分だけでなく興奮させたらしかけ絵本を思い出しました。幼児は私たちにいのかと思ふました。絵本といはもうない奇想は発想をよくします。自分も童心に帰ったつもりで、自分がわくわくできるような作りを考えようになりました。	絵本を作ることを通して乳幼児への接し方に対する考えが変りました。市販の絵本のつくりからして、乳幼児は喜怒哀楽という本心にシンプルな感情からできています。だから、こちら側もその本心にシンブルな感情を乳幼児に伝えていければいいのかなと思ふました。絵本といはもうない奇想は発想をよくします。自分も童心に帰ったつもりで、自分がわくわくできるような作りを考えようになりました。	物を作るという作業を久々にしました。なんだかともわくわくしました。だから乳幼児と接するときはこんな風に童心に帰り、一緒に目線で楽しむことが大切のかなと思ふました。乳幼児と一緒にわくわくしたり、感情を共有することで身近に感じてもらえる気がします。絵本も同じで、どれだけ乳幼児の身近な感情に迫れるかどうかではないかと思ふます。以前はただ単にインパクトの強さが大切だと思っていました。しかし、製作してみても絵本に対する考えが変りました。
乳幼児にも分かりやすくつくること。字を大きくする。絵を大きくする。質感を大切に。仕上げいっぱい。	身の回りのものを細かく観察すること。トマトとか。毛糸をはる技術。リアリティーの追求。	乳幼児に絵本を読んでみてほしい。仕上げがいっぱいなので楽しいかもしれない。	幼児が楽しめる絵本を作ろうと思って作っていたら、自分も作るのを楽しめた。
乳幼児が見ても分かりやすく、おもしろくて興味を持てるものにした。	乳幼児の目線で考えるということ。手作り絵本は乳幼児の成長にとっても効果的である。	小さな子どもは結構好きなので、この絵本を見せてあげたい。	作っているとき意外と自分も夢中になって楽しかった。
補修が比較的容易なこと。 幼児が力を加えても復元しやすいこと。	難解な内容にしないこと。 丈夫に作ること。 衛生的に作ること。	乳幼児、特に0歳や1歳で必要なだろうという考えから、創造性豊かにするには必要なのだと思ふました。	昨年の海外研修でホストファミリーの家に0歳の子どもがいました。0歳で絵本を十分理解しているらしかったので、絵本で子育てすることは非常に重要なことだと思ふました。
ことばを入れるときには必ずひらがなで簡単な単語にしました。絵は幼児が面白いと思うように動物を登場させているような表情を描いてみました。単純でわかりやすくなるよう気をつけました。	製作を始めるときまず幼児はどのよな絵やお話を喜ぶんだろう？と考ふました。自分が小さかった頃に好きだったキャラクターや絵本を思い出したり実際に本をひっぱり出したり参考にした。子どもに戻った気持ちで考ふてみました。そして、19さんの本を読ませてくれていたんだと改めて感じて、今では乳幼児はかわいと思ふただけでした兄の気持ちを考えることは身についたと思ふます。	参考として、家にあるたぐさんの幼児向けの本を見て「この本が好きたな」と思うと同時に、自分はこの本を面白いと思ふて、そして勉強にもなっていたんだと思ふました。親は自分に教育のためにもたぐさんの本を読ませてくれていたんだと改めて感じて、今では乳幼児はかわいと思ふただけでした兄の気持ちを考えることは身についたと思ふます。	製作前は、絵本を作るということでも面そうだなと思ふていただけでしたが、作っているうちに、幼児はどのよな絵を喜んで興味をもってくれるのか考ふるようになって、使う言葉や絵の表情など工夫が必要な部分のいろいろあると気づきました。幼児のことについては少しでも考ふる機会になったし、楽しんでできたのでよかったです。

いかに読者を意識しているか。	ものを作り上げていく中での過程を 考える力。客観的に見る力。	乳幼児が読んでイイと（面白い）と思 えるようにしようと思うようになった。 乳幼児のためになったらより嬉 しい。	プロの絵本作家などに自分の作品で 改めるべき所、評価できることを教 えてもらいたいと思うようになった。 作る前は何の感情もなかった。
内容は乳幼児にわかりやすいよう でできるだけ簡単にする。面白い内容に する。色あざやかに色々な素材の物 を使ったらいと思うけれど危な かったり、けがをしそうなものは絶 対に使わない。	乳幼児の気持ちを考えて作れて、私 が小さかったときのことを思い出し てしまい、家で絵本を読んでみたり しました。そして、絵本には、とて も作者の愛情が入っていると思い、 作者自身、子どもの目線で作ってい ななと思いました。絵本を作ること でますます子どもの興味をもちまし た。絵本とは、子どもとの大切なコ ミュニケーションの道具の一つだと 思います。	乳幼児に対する気持ちは、前と比べ てますます育てることは素晴らしい ことなんだと思いました。そして、 私たちが、子どもがことばなどを覚 えやすいように手助けして、絵本を 作ってあげるのもいいと思いまし た。特に親にとって、子どもはとて も大切な存在だと思うので、そのよ うな大切な心を持って子どもと接し たいです。	最初は私に絵本なんて作れるのかな と違って不安だったけど、作ってい くうちに子どもの立場に立ってみるこ とができ、子どもの読みたくなるよう な楽しい絵本を作りたい!と思いまし た。今回だけでなくこれからも絵本な ど作っていききたいと思います。
難しいことばやストーリーにしない ようにした。	絵本は手ざわりが大切かもしれな い。	より身近に感じるようになりました	絵本がここまで大切なものだと 思っていなかった。
小さな子どもでの内容が理解でき ず、読みやすいことと絵をたくさん 入れること。教育上（道徳的）によ くないことは書かないほうがよい。	自分が小さい頃にも絵本をよく読ん でいたことを思い出して、それに よって心が豊かになったり、いろい ろか自分の身近には関わりがないと 思っていたけど、自分が小さい頃 のよいものだと思う。悪いことはし てはいけないとか当たり前のこと をわかっていくことで小さな 子供での人として大切なことを理解 できるから役立つ。	大人になってもし子どもを生んで育 てる立場になったら関わりが あるかな、というくらい遠い存在とい うか自分の身近には関わりがないと 思っていたけど、自分が小さい頃 のことを思い出したりその目線で絵 本を作ってみたりして懐かしく思っ てそこまで遠い存在ではないと感じ た。	毎絵本というのは見たことがなくて 初めて自分で作ってみたいけど、紙の ものに比べてさわって楽しめたり温か い感じがした。手作りというのは愛情 がこもっていて子どもにも喜んで もらえるものだと思う。
ストーリーを簡単にすること。	アイデアを生み出すこと。飾り付け のセンス。	前より身近に感じるようになった 気がする。	初めは絵本の製作とか面倒だと思 ったけど、作っていくうちに楽しくな っていった。（他7人）
字を書いてストーリーにしても乳 幼児に伝わりにくからさわって楽 しめるものにした。そして、ある程 度「わけっこ」という知識がある年 齢になったらストーリーにも目を向 けてほしい。	いかに興味を持ってもらうかが大事 だと思った。 いかにして乳幼児に絵本の楽しさを 伝えるかということ。	文字を理解してもらえないから絵で アピールするしかない。	大変だったけど、やってみると楽し かった。細かく作るよりダイナミック に作ったほうがわかりやすいと思っ た。
難しすぎない程度で。	フェルトの切り貼りに関して僕の右 に出る者はいない。	どの程度の内容を理解できるかとか どんな内容だと喜んでくれるか幼児 の思考を考える必要があったので面 倒だと思ふ気持ちが大きくなりました。	絵本製作はとてもおもしろかったで す。ストーリーもそんなに考えずに気 楽に作れました。
幼児にわかりやすい内容をつくる絵 を大きく見やすくかく。	ボタンやフェルトを工夫すること。 アイデアを考えること。	かわいい幼児にはかわいい絵本が必 要と思った。	初めは絵本の製作とか面倒だと思 ったけど、作っていくうちに楽しくな っていった。（他7人）
あまり恐ろしく過ぎないようにし た。	どうすれば興味がわくか。乳幼児は どのくらいまでの文字数が適切か。	どの程度までならわかってもらえる かと考えるようになった。	やっていくうちに色を彩やかに、材料 をいろいろ使い楽しくできるように 意識した。
楽しい雰囲気を出すために使う色ど かに注意した。	「見て楽しい絵」というのを考える のは難しいと思った。	乳幼児は絵を見るだけでも楽しむこ とができるというが、自分も絵本作 りや他の絵本を見たりしてその気持 ちがわかった。	絵本の製作は大変そうだと思っ ていたが、絵本を作ることも見ることも たりや他の絵本を見たりしてその気持 ちがわかった。
乳幼児が対象であるということを含 頭において絵柄があまり過激なもの にならないようにし、また理解しや すいように単純なものとした。	伝えたい内容をよい意味で単純化し てわかりやすくすること。 絵本はいつごろから描き始められた のだろうと考えた。 絵本以外にどのような道具があるか 知りたくなった。	絵本の製作を通して、以前よりも乳 幼児に対しての愛着が持てるよう になった。	絵本製作の前は「たかが絵本だ」と絵 本に対してその有用性や意義を若干 否定してしまっていたが、実際作っ てみると絵本には楽しく言語心身の 成長を促進させることができるなど のさまざまな力がありそう。
テーマ性をしっかり持つ。何を伝え るか。	幼児のレベルを考える。	乳幼児の気持ちの変化を考えるよう になった。	初めは絵本の製作とか面倒だと思 ったけど、作っていくうちに楽しくな っていった。（他7人）
乳幼児にもわかりやすく作ること。 教育上悪影響な表現を避けること。 安全性も考慮すること。	絵本の良さがわかった。絵本と仲間 と一緒に作ることに協調性が 生まれた。手先の器用さが上がった。 人権についての問題の理解が深まっ た。自分たちでストーリーを考えた もので想像力が上がった。乳幼児の ものとのらえ方がわかった。	自分が幼稚園に通っていたとき、親 に絵本を読んでもらっていたのを少 し思い出した。その時の自分は、絵 本を読んでもらったりまたは自分で 読んでいたりして、学習的な意欲など 上がった気がする。やはり絵本は幼 児にとってよいものであると思う。 もちろん大人もだが。	製作前はめんどくさいと思ってい たが、作ってみると意外に面白かった。 製作前には乳幼児にわかりやすいも のを作ろうと努力したが、結果的にわ かりぬくものになったことを反省 しています。

4. 授業の成果と課題

平成18年度に作成された絵本のうち、布絵本は「犬のおまわりさん」、「わけっこ」、「どうぶつ」、「いただきます」、「十二支のどうぶつ」、「Who am I?」、「スイミー」であり、紙絵本は「立体絵本」、「おさるの一日」、「デザート」、「クリスマス」であった。布絵本では、手触りがよく、明るい色がたくさん使われ、布へ他の素材を貼り付けるなど工夫が見られた。布を貼り付けたことによって、表情豊かな仕上がりになっている。紙絵本の場合は紙に絵を描くだけでなく、紙を切り抜く、色紙や布を貼り付ける、立体構造にするなど工夫が見られた。例えば、生徒による評価が高かった「犬のおまわりさん」は、歌の順にストーリーが展開される構成になっており、歌いながら楽しむことができるものであった。

第3次の授業後に、絵本そのものや絵本製作の意義や効果について、8項目のアンケート調査を行った。

図4、5は「乳幼児にとって絵本にふれることの効果」について尋ねた結果を示したものである。図6、7には、「親やまわりの人が乳幼児に絵本を読んであげることが、その子にとってどのような効果があるか」について尋ねた結果を示した。さらに「絵本を製作することについてどう思っているか」については、その結果を図8に示した。

図4、5が示すとおり、乳幼児期から絵本にふれることは、楽しく、成長に必要であり、ことばを覚えるという観点からも大切であることを大多数の生徒は理解した。また、図6、7からは、乳幼児に絵本を読み聞かせすることは、先の3点に加えて、読み手とのかかわりを強めることができる、と生徒は考えていることが窺われる。図8の「絵本を作ることは楽しいか」を肯定した生徒は、全体の94%を占めていた。また、「乳幼児に絵本を作ってあげたいか」という問いについては、71%の生徒が肯定しており、さらには88%の生徒が、「手作り絵本は作る人の愛情が伝わる」と思っていた。本年度の試みとして、絵本製作前に内外の既製絵本を十分に観察させたこと、さらにはグループで製作に取り組ませたことにより、創意工夫への意欲がわき上がったことが、このような高い数値をもたらしたと思われる。

表3は、第3次授業後のアンケート調査の自由記述部分をまとめたものである。絵本製作の前後での気持ちの変化がリアルに示されている。絵本製作の前には、約半数の生徒は、「大変そうだ」、「何の感情もない」、「面倒だ」といったマイナスイメージをもっていた。しかしながら製作を進める中で、「楽しくなっていく」、「面白かった」、「プロの絵本作家などに自分の作

品で改めるべき所、評価できるところを教えてもらいたいと思うようになった」、「絵本に対する考え方が変わった」など意欲関心が高まってきたことが示された。手作り絵本には、創意工夫しながら、自身が楽しんで製作することができるという本質的な特徴があるということである。さらには、絵本製作の前後で乳幼児に対する気持ちについては、望ましい方向に向けての変化が見られた。製作後、「どの程度の内容を理解できるか、どんな内容だと喜んでくれるか、幼児の思考を考える必要があったので、面倒だと思ふ気持ちが大きくなった」と答えた生徒が1名いたが、その他の生徒は「乳幼児への愛着が持てるようになった」、「乳幼児の気持ちを理解しようとする」、「乳幼児がかわいいと思う」など、乳幼児に対する気持ちにプラスの変化が見られた。

以上のように、平成18年度の絵本製作を通して、当初のねらいとしていた、絵本が乳幼児の発達に与える影響を捉えさせることが可能となり、さらには生徒の人間的な感情の醸成と自らの成長に関する理解の深化を図ることができたといえる。

ただし、製作された絵本を生徒相互で評価させたところ、「何歳児向けの絵本だと思うか」の問いに対して、ねらいどおり0～1歳児用と見なされた絵本は約40%に過ぎなかった。その原因の一つとして、0歳児に適した絵本がどのような絵本であるか理解できないまま、絵本の構成、ストーリーを作成することとなったためであると考えられる。この年齢の乳幼児に対しては、オノマトペ絵本が適しているが、このことを生徒に十分理解させることができなかったことが反省される。また、「ブックスタートの取り組み」について知らせた後、赤ちゃんも楽しめる絵本の例として、「三匹のやぎのがらがらどん」、「もりのなか」など、もっと大きい幼児を対象とした絵本を提示したことも原因の一つとして考えられる。

なお、生徒の相互評価においては、クレヨンなど、特に紙絵本で使用している画材について、適切であるという答えが多かったが、これは、乳幼児が何でもなめる、口にもっていくという行動をすることが想定できていないからだと考えられる。次年度の取り組みにおいては、この点の指導も強化したい。

おわりに

附属高等学校における平成18年度の絵本製作学習は大きな成果を上げたが、ストーリーや絵、画材にかかわる幾つかの課題も残された。次年度はそのような課題の解決を図りつつ、実践研究の高度化を目指したい。